

初期珠洲系陶器生産について

野末浩之

1. はじめに

北陸および東北日本海沿岸域において、中世遺物としてしばしば見出されるいわゆる珠洲系陶器は、近年増加する中世遺跡を検討するうえで重要な基礎資料となっている。また、歴史学分野において民衆史・社会史が見直されてきており、政治史のみならず、社会背景としての民衆生活史の面においても、珠洲系陶器および他の陶磁資料研究はより具体的な実相に迫るための一手段となりうるものである。

この珠洲系陶器の研究は、これまで石川考古学研究会が中心となって行なわれてきており、その成果も公表されてきている。以下では、初期珠洲系陶器生産に関して筆者の考えるいくつかの問題点を提示し、それに対して、従来の研究成果を踏まえつつ考察を行なうものである。なお名称について、以下では北陸産・東北産を問わず「珠洲系陶器」と記すこととする。^(注1)

2. 珠洲系陶器とは何か

石川県珠洲郡・市における珠洲系陶器生産についての文献史料は存していないが、土器生産を行なった窯跡の認識は、すでに1923年の『石川県珠洲郡誌』において見られる。戦後になって珠洲系陶器が考古学的な研究対象となり、窯跡の調査が進められるにつれ、^(注2)しだいに陶磁史上の位置も明らかにされてきた。その当初の認識は、駒井和愛氏が述べている如くである。つまり、珠洲系陶器は「表面に叩き文のある須恵器系統を引くもの」であり、「少なくとも足利時代頃迄行なわれていた事も知られるものである」との評価である。これは珠洲系陶器とは須恵器の退化したものであり、須恵器が中世にも存続していたとの推測を与えるものであった。しかしその後珠洲系陶器を須恵器とは別ものとする考え方が打ち出された。1961年の日本海総合調査により、浜岡賢太郎・橋本澄夫両氏は能登出土の珠洲系陶器が甕・壺・片口鉢の3器種の構成をとっている点を指摘し、須恵器とは異なるものとの判断を下した。その後古美術研究家との談合により「珠洲焼」の名称を与えるに至った。^(注3)しかしそれと前後して、東北日本海沿岸域において「珠洲焼」と同様の技術系列の須恵器系中世陶器窯の存在が報告されはじめ、^(注4)窯跡出土以外のものの生産地を珠洲とも東北ともわかには決めがたい状況も現われ、したがって「珠洲焼」という名称のみで捉えることにも問題が生じている。もちろん、器形・製作技法の細かな観察および胎土の理化学的分析により、文字通り珠洲産の「珠洲焼」と東北産のものとの識別がある程度可能になってきているが、^(注5)そういうものがすべてではない。そこで現在では、一括して「珠洲系陶器」という名称で表現することも行なわれている。ただこの名称からは、珠洲からの技術的影響のもとに、東北で同様の技術が採用されたという意味で捉えられがちであるが、あくまで「珠洲焼」と同様の技術系列のものという便宜的・一時的な名称であるべきである。

さて、珠洲系陶器は現象的な面から見て、①分焰柱を持たない窖窯による還元焰くすべ焼を意図したものである、②甕と大・中形の壺は粘土紐巻上げ叩き締め技法で成形し、外面には右下がりの条線状の叩目痕が、内面には小石状のあて具痕が残るものが多い、③すべて平底である、という特徴から他の須恵器系中世陶器と一線を画することができるが、このような特徴をもつ珠洲系陶器に対する陶磁史上の見方は次の2つがある。一つはそれを「中世須恵器」とする見方であ

り、いま一つは須恵器とは異なる「須恵器系陶質土器」とする見方である。

前者の立場をとる橋崎彰氏は1967年の『日本の考古学』において、中世窯業生産物をⅠ類—瓷器生産の発展としての高級陶器と、Ⅱ類—無釉の日常雑器（須恵器を継承するもの）とに分類し、珠洲系陶器をⅡ類に含めた。1972年にはこれを発展させた形で、中世陶器を瓷器系・須恵器系・土師器系の3系列に分類し、さらに須恵器系をA類—古代の須恵器の系譜を引くが、鎌倉時代に変質するもの、B類—須恵器の生産技術をそのまま継承し、還元焰焼成による灰黒色の統須恵器とでも言うべきもの、とに細分し、珠洲系陶器をB類に含めている。しかしここでは、B類があくまで須恵器として捉えられている。^(注7)

一方、後者の立場をとる吉岡康暢氏は、須恵器ではないとする考え方である。それでは同じく古代の須恵器生産の伝統を受け継ぐという点で一致しながら、何故このような認識の差が生まれてきたのか。吉岡氏は、①巻上げ成形、条線状打圧具による叩き締めと、ロクロ成形の占める比重が大きい、②甕・壺・片口鉢から構成され、商品化を前提として量産された民間雑器である、③そのことは常滑などの中世陶器と同じ性格である、④古代の須恵器生産の伝統の稀薄な地域に出現している、などの須恵器とは異質あるいは隔絶性を示す要素を列挙して、須恵器とは一線を画している。もちろんここでは「須恵器」の定義が問題となるわけであるが、一般的には次の特徴をもつものの総体として表現される。^(注8)

①高火度焼成に耐えうる陶土を用いている。^(注9)

②成形にはロクロを用いた「水挽き技法」と、「巻上げ技法」がある。

③窯窯による「くすべ焼還元焰焼成技法」を行なう。

④無釉である。

以上からすると、珠洲系陶器は須恵器の範疇の中で捉えることが可能である。しかし、上に挙げたいわば現象的な面からみた特徴でもって「須恵器」そのものを抽出することは厳密にはできないのではないかと考える。そこで必然的に生産体制的な面からも検討する必要が出てくる。先の吉岡氏の挙げた諸特徴のうち②と④の点は、珠洲系陶器生産体制の構造的特質に注目する時、重要な意味をもって浮かび上がってくるのである。言い換えれば、珠洲系陶器が焼成法を含めた製作技術において須恵器の系譜を引くことは疑いえないが、生産上の基本原理が古墳時代より連続と続けられた須恵器と同一とは見做しえない。器種においても、甕・壺・片口鉢という他の中世窯に普遍的な3器種にほぼ限定され、貨幣経済の進展に伴うより広範な流通を意図した商品であることは、古代的な地域圏内の消費を目的とし、貯蔵形態や供膳形態の様々な器種を包括する生産体制を基本とする須恵器と同質のものとするべきではないと考えるのである。つまり、珠洲系陶器の性格を考えれば、歴史上の位置づけの上では、須恵器との異質性をより強調すべきと考える。

以上のような事は、珠洲系陶器そのものの研究が進み、一般的な理解が得られている今、改めて問題とするに足りないかも知れないが、珠洲系陶器のみならず、他の須恵器系中世陶器を議論するにあたって、認識の基本的な態度を明確にしておかなければならないと考えるため敢えて問題とした。それはまた、「須恵器」の定義の再検討を迫るとともに、その中世までの存続を認めるか否かといった問題にも連らなってくるのである。

3. 生産開始期の様相について

珠洲系陶器そのものもつ問題点については、これまで吉岡氏をはじめとして様々な点が指摘されている。その問題を含めて、初期珠洲系陶器生産に関して筆者なりの考察をしてみたい。

吉岡氏を中心とした研究成果によると、能登地方での珠洲系陶器生産は、窯跡出土資料および紀年銘共伴資料から検討して、12世紀中葉前後の開始が推定されている。吉岡編年においては、これから13世紀初頭までをI期とされている。一方東北においては、現在まで発見されている窯跡から採集した資料からみて、珠洲I期に併行する時期での生産開始が想定されている。また、東北の在地窯産とみられる紀年銘共伴の経塚出土資料から、さらに四半世紀遡る年代を想定することができる。いずれも12世紀中葉頃には生産が行なわれていたことになる。^(注12)

珠洲系陶器が須恵器を受け継ぐと一口にいっても、様相はそう単純ではない。そのことは製作技法、焼成法において関連性が認められるということであって、型的には一転した内容となっており、時期的・器種的な断絶がある。珠洲窯開窯直前期の様相をみると、北陸における奈良・平安時代の土器編年のⅦ期（最末期）には、須恵器は甕のみの生産であり、他は東播系と目される須恵器系中世陶器と土師器供膳形態および中国陶磁がセットをなす。^(注13) この時期は暦年代にして11世紀後半以降であるが、器種構成からみて須恵器から珠洲系陶器へ直接的につながるとは考えられないのである。

ところで、12世紀前半期には、北陸西部において西日本の須恵器系中世陶器や中国陶磁とともに、東海地方の常滑窯製品の移入がみられる。これら他の中世陶器が能登地方の中世陶器生産の直接の契機となったかは定かでないが、注目すべき事実であろう。また、初期の珠洲窯製品の器種構成が甕・壺・片口鉢の他に、僅かではあるが浄瓶や碗などの特殊なものを含むことも、在地窯の継続というより、外来の影響といったものを強く印象づけている。

一方、東北における出現期の様相をみってみる。珠洲I期併行とされる須恵器系陶器窯が3基確認されているが、吉岡氏の予測では、100%還元焰焼成の茂谷沢窯から毘沙門窯、赤川窯へと推移するにつれ、しだいに東北固有の須恵器・瓷器折衷系へと転化し、ついには瓷器系陶器生産へと移行していくという。しかし、折衷系なるものを認めるとすれば、上の折衷系窯の製品と考えられている久安5年（1149）銘経筒を共伴した秋田県平鹿郡大森町上溝観音寺経塚出土例は、珠洲I期あるいはそれより先行する可能性があり、須恵器系から折衷系という流れと断定できず、むしろ東北において中世陶器生産が開始される当初から折衷系なるものが生産されたと考えられる。^(注15)

須恵器、瓷器折衷系なる陶器は、須恵器系の製作技術をとりながら赤褐色系の発色を示し、一見酸化焰焼成かと思われるようなものと、逆に瓷器系の製作技術によって還元焰焼成によるかと思われるものを指すが、前者のような特徴をもつものに関連して注意されるのが「須恵系土器」あるいは「あかやき土器」と呼ばれているものである。すべてを同一の分類中に含めてよいかは不明ながら、この「赤焼」のものは関東以北に普遍的に認められる。これはいわゆる折衷系と同様に、須恵器（系）の製作技術により、最終的に酸化焰焼成によるらしいという点で近似するが、器種的には供膳形態を主としており、いわゆる折衷系のそれとは異なっている。時期的には須恵器生産の終末期に現われ、その後須恵器にとって換わるという。その終末期の暦年代は、多賀城跡出土土器の編年から、11世紀から12世紀にかけてのある時期とされている。また、遺構の性格から厳密な下限年代とはできないものの、文治5年（1189）焼失の記事のある平泉館跡から「須

恵系土器」が出土しているという。以上のことから、東北での中世窯創始期においてなお「赤焼」^(注18)の土器が生産されていた可能性があり、いわゆる折衷系との何らかの形で関連していたかとも考えられる。ただやはり、器種構成の断絶や、同一窯内での「赤焼」の土器と折衷系陶器との併焼の事実もないことから、具体的に検証するまでには至っていないのが現状である。東北での須恵器系中世陶器窯は、上の「赤焼」の土器の伝統に加え、太平洋沿岸域において灰釉陶器や常滑・渥美といった東海地方の瓷器系の影響を早くから受けていることから、当初からいわゆる折衷系として出現したのではないかと考える。

そうすると、古代において須恵器と「赤焼」の土器が区別して扱われているのと同様に、中世においても須恵器系と折衷系とは別々に扱われるのが本来ならば当然である。しかし、酸化焰焼成品と還元焰焼成品とは同一窯内にも両方が現われることがあり、折衷系とすべきものの設定基準が曖昧であるため、現実的には両者を厳密に区別するのはむずかしい。現に珠洲窯でも酸化焰焼成かのような赤褐色系のものがある。さらに窯構造についても、双方とも分焰柱をもたない窖窯である点からも、焼成法について特に注意していたとは思われない。

以上のことから、いわゆる折衷系を認めつつも、総合的な製作技法において珠洲系陶器として一括して考える。

4. 分類、編年について

現在まで吉岡氏により概要が公表され、北陸・東北いずれにおいても各報告書での時期判定等に資している。本来ならば東北においては、在地窯での独自の編年体系を策定し、それに基づくべきであるが、資料に限りがあり、まだその段階ではない。両地域のことを同一製作原理とした以上、暫定的であっても編年において両者を一括して捉えるべきである。編年は珠洲窯製品と考えられるものを中心としてⅦ期に区分されている。ここでは各期の具体的な様相である様式＝窯式として捉えられているが、窯跡資料は複数型式にわたる内容をもつものがほとんどであり、それは標式窯とされる窯跡資料においても同様である。珠洲窯跡資料は法住寺窯跡群を除きいずれも試掘資料であり、床面毎の資料により型式設定を行なうまでには至っていない。

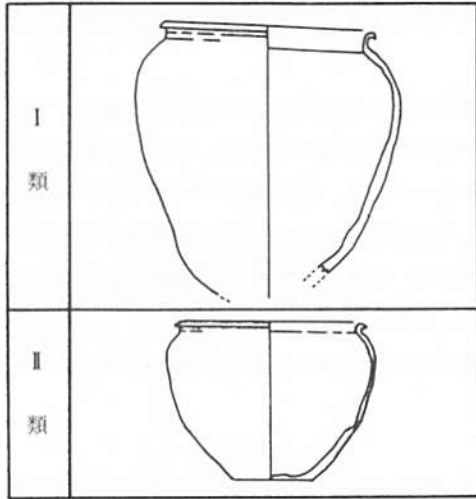
また、これまでは甕と壺T種（叩き壺）の分類が曖昧である。甕は原則として口径：器高＝1：1程度のもので、3段成形により、壺T種に比べてロクロ調整の占める割合が低い。叩打は口頸基部より下がった位置から行なうものと、口頸基部直下から行なうものがあるのは周知のとおりである。底部鉢形部分の叩打は外面全体にわたり、また胴部の叩打による条線方向と底部鉢形部分のそれとにくい違いが多く見られることから、別々の叩打後の接合ということが考えられる。甕は法量によって口径60cm以上の大形甕、40cm前後の中形甕、30cm以下の小形甕に分けられ、大形甕が量的には最も多い。

一方壺T種は、口径：器高＝1：2あるいは口径が1以下のもので、3段あるいは4段成形により、ロクロ調整を多用する。叩打は甕とは異なり、全体の成形を行なったのちに施され、肩部から腰部にかけ一定方向ないしはなだらかな叩き締めの際の円弧の痕跡を残すものが多い。また底部鉢形部分は、初期のものでは叩打が行なわれないか、または叩打のあとロクロ調整によって擦り消されたものがしばしば見られる。壺T種は法量によって器高50cm以上の大形壺と30～40cmの通有の壺に分けられ、後者が量的に多い。これらはあくまで一般論であり、全器形のわからないものでは両者の区別がつきにくいものもある。そこで、遺跡出土の一般的なタイプの資料からの計測値に

より、胴口指数・高口指数ともに70をこえるものを甕とし、それ以下のものを壺T種としたい。

(補注)
 以上の問題点を念頭に入れ、特にI期珠洲窯の標式資料とされてきた寺社1・2号窯およびI期珠洲系陶器について、その内容から細分の可能性を指摘すると共に、北陸・東北両地域の差異について触れてみたい。なお、ここで取り扱うのは甕・壺T種・片口鉢に限定する。

(1) 甕



第1図 甕分類

甕は完形資料が僅かなため、寺社1・2号窯資料により口頸部形態を軸に次のように分類した。

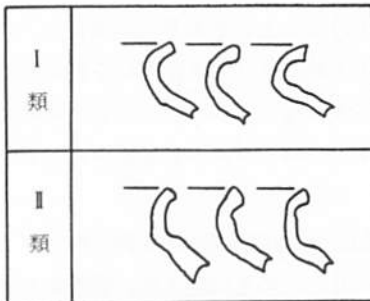
I類 長めの口頸部が大きく外反あるいは垂下し、肩が張るプローション。

II類 口頸部は短くなり、コの字形をなす。口縁端部が肥厚気味になってくる。肩部はやや張り出す。

以上は窯跡資料のみの分類であるが、遺跡出土資料についてもI期資料を同様に分類できると考える。I期には紀年銘共伴資料は未だ知られていないが、II期以降の甕への型式変遷や、壺T種との口縁部などの近似から、これがI類からII類へと推移することは明らかである。なおここでは個別資料の分類は行なっていない。

(2) 壺T種

壺T種においては、口頸部形態、胴部形態、叩打痕(文様、原体の単位条線数、叩打順序)、底面状態等について分類が可能である。各資料においてそれらがある程度のまとまりをもって現れているはずであるが、これらの要素のうち最も時期を反映していると考えられる要素、つまり型式の指標を設定しなければならない。そして他の要素は同一型式内での従の要素となろう。このことについて、例えば紀年銘共伴資料を見てみると、口頸部形態に最も一貫した規則性が窺える。したがって口頸部形態を主として型式設定することができる。



第2図 壺T種口頸部形態分類

口頸部形態の分類

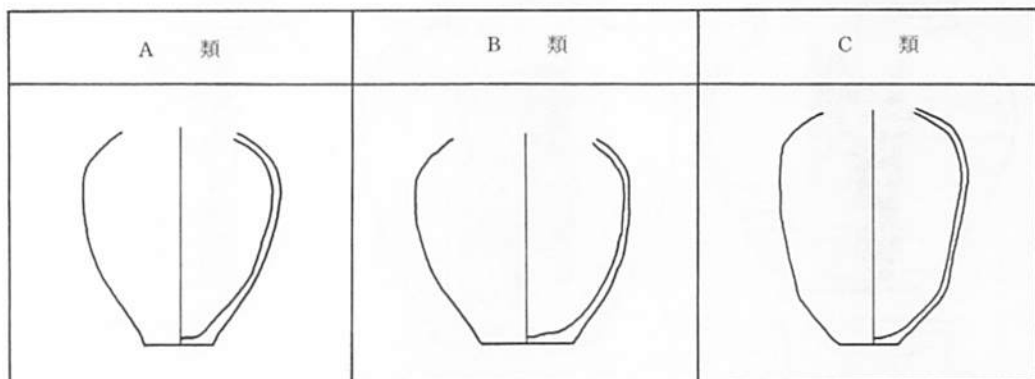
I類 頸部が明確であり、長めの口頸部が強く外反し、断面が横U字形をなすもの。

II類 これも頸部が明確であるが、直立しており、さらに端部付近で外反するもの。

I期珠洲系陶器壺T種の口頸部形態にはこの2種類が見られ、さらにこれに付随する胴部形態には次の3形態が認められる。

A類 胴部形態が倒卵形をなし、胴部最大径が肩部に明瞭にあらわれている。このタイプは広口になるものと狭口になるものの両方がある。

B類 胴部形態が球胴形をなす。腰部がやや張り出し、A類とC類の中間的な形姿として捉えられる。



第3図 壺T種胴部形態分類模式図

C類 長胴型の胴部をもつもの。腰部が張り出す（底部鉢形部分と胴部の境で明瞭な角度を作る）もの。

この胴部形態は全時期の壺T種について適用できるが、後にも述べるように、時期的・地域的な在り方がある程度反映していると考えられるのである。また、型式変遷の主たる要素とはできないものの、叩目痕の特徴について、細密な条線で頸基部より下がった位置から深く、比較的狭い範囲に施されるものから、粗い条線で頸基部直下から浅く、より広範囲の叩打へと変遷する傾向がある。

以上の口頸部形態を軸とした分類では律しきれないが、初期珠洲系陶器と見做される一群がある（第4図）。これは直立する口頸部がそのままおわるか、または端部を外へつまみ出すものであるが、叩目痕の特徴は通有のI期珠洲系陶器に共通するものである。後に触れるが、仮にこれをI'類としておく。

以下、口頸部形態と胴部形態の組み合わせにより、初期珠洲系陶器を型式分類してみたい。

I A型式（第5図）

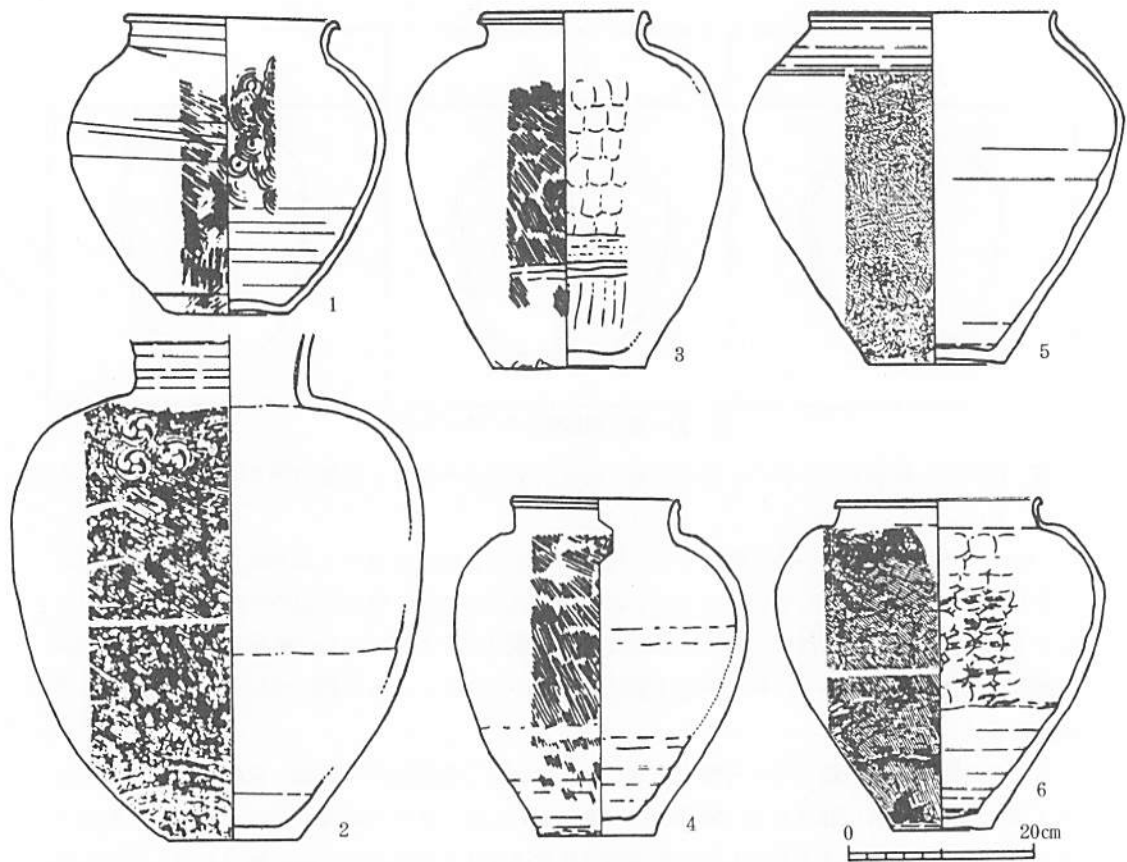
I類の口頸部がA類の胴部に付くもの（以下同様）。仁安2年（1167）銘経筒共伴の富山県上市町京ヶ峰経塚出土のものが指標となる。この型式は4段ないしはそれ以上の成形段階を経ており、ロクロ調整を施す度合いが高い。石川県金沢市小坂経塚出土のものは、北陸には稀なタイプで、底部粘土板の縁部上に均一な器厚で巻上げるため、底部鉢形部の内底面と体部に明瞭な角度をもつもので、東北に多いタイプである。秋田県湯沢市松岡経塚出土のものは、条線状でない叩きを施した後、細かい刷毛状具でナデつけており、珠洲系陶器とするには異論のあるものだが、基本的な成形技法において珠洲系陶器のそれを踏襲しており、同じ範疇に含めて考える。

I C型式（第6図）

1はI A型式の8と同様の製作技術と考えられる。2は狭口、3は広口の差こそあるが、両者ともに粘土紐巻上げ痕跡が明瞭であり、また全ての個体について口縁端部が6類で、叩目方向がb類と、製作技術の画一性が窺える。
(注20) (注21)

II A型式（第7図）

口頸部形態や叩打割合などの点で、I A型式の後続型として捉えられる。I A型式同様、底部鉢形部内外面のロクロ調整の部分が多いが、外面にケズリを施すものが1個体存する。その他、先の小坂経塚出土品と同様の底部鉢形をなすものが多く、中には嵌め底とみられるものも存する。



第4図 壺 T 種 I' 類

口縁端部形態には4・6類が、叩目痕にはa・b・c類がみられる。なおこの型式に分類したものの中に、紀年銘共伴資料として、新潟県西蒲原郡巻町金仙寺経塚出土品がある。(注23)

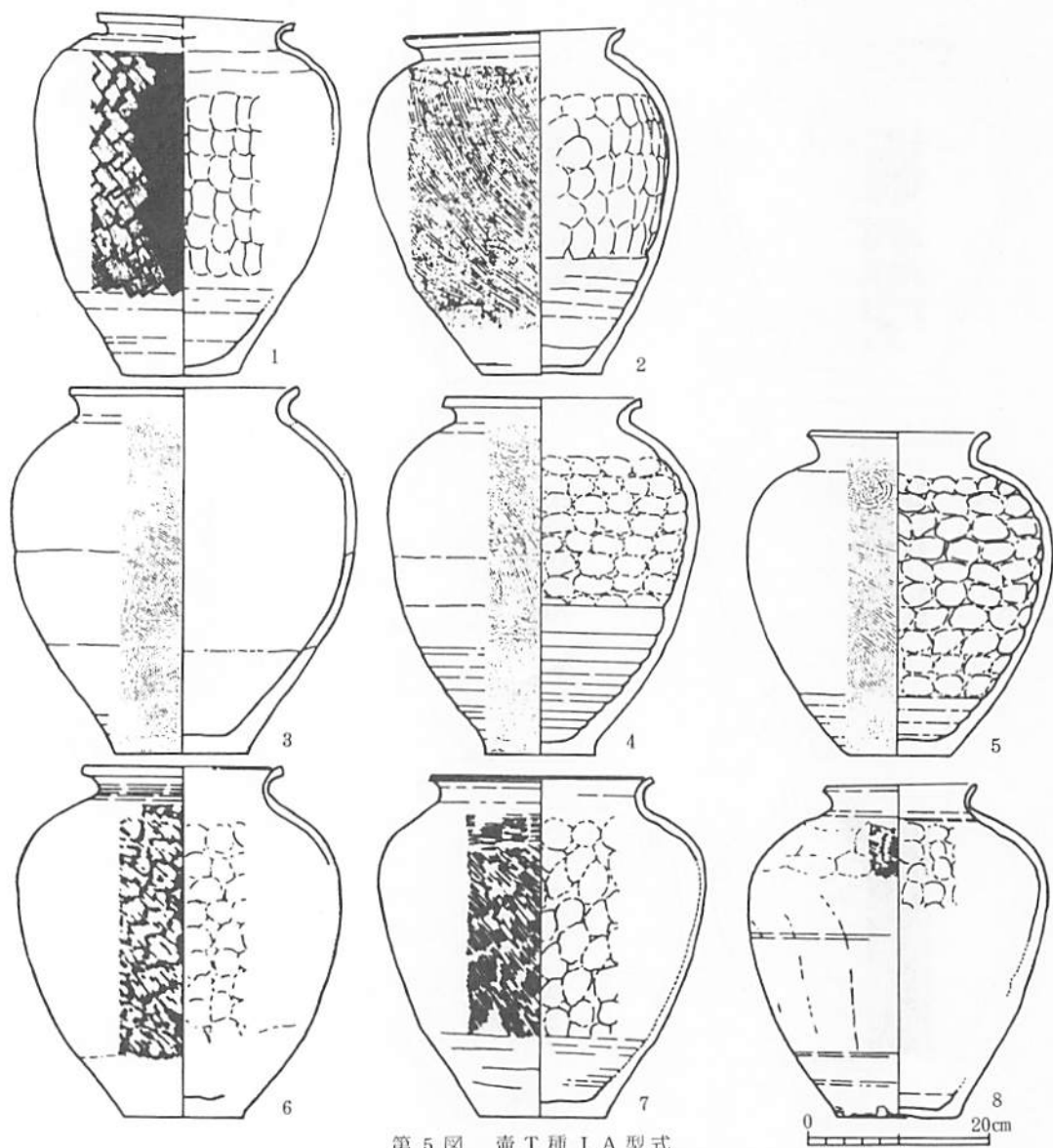
II B型式 (第8図)

1は内面に同心円文が見られ、寺社窯資料との共通点となっているが、長い口頸部がコの字形をなし、端部をつまみ出すものは知られていない。底部鉢形部も同型式の他のものとは異なった作りであり、極めて特殊である。他の2点は3が多面体状の口縁端部をもつ以外は同じ製作技法とみられる。

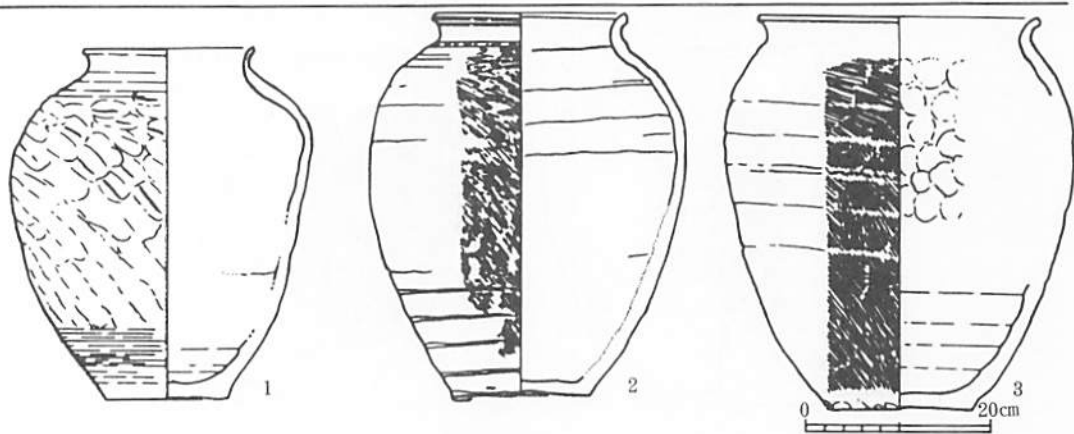
(3) 片口鉢

この器種は、いわゆる播鉢と称されることも多いが、内面に櫛目のないものは実際の用途を「播り」に限定することには無理がある。また片口部分を備えていないかの如き資料も存するが、片口のあるものが通常のタイプであるため「片口鉢」の名称を用いた。I期珠洲系陶器片口鉢は、窯跡資料をもとに遺跡出土資料に敷衍して次のように分類した。

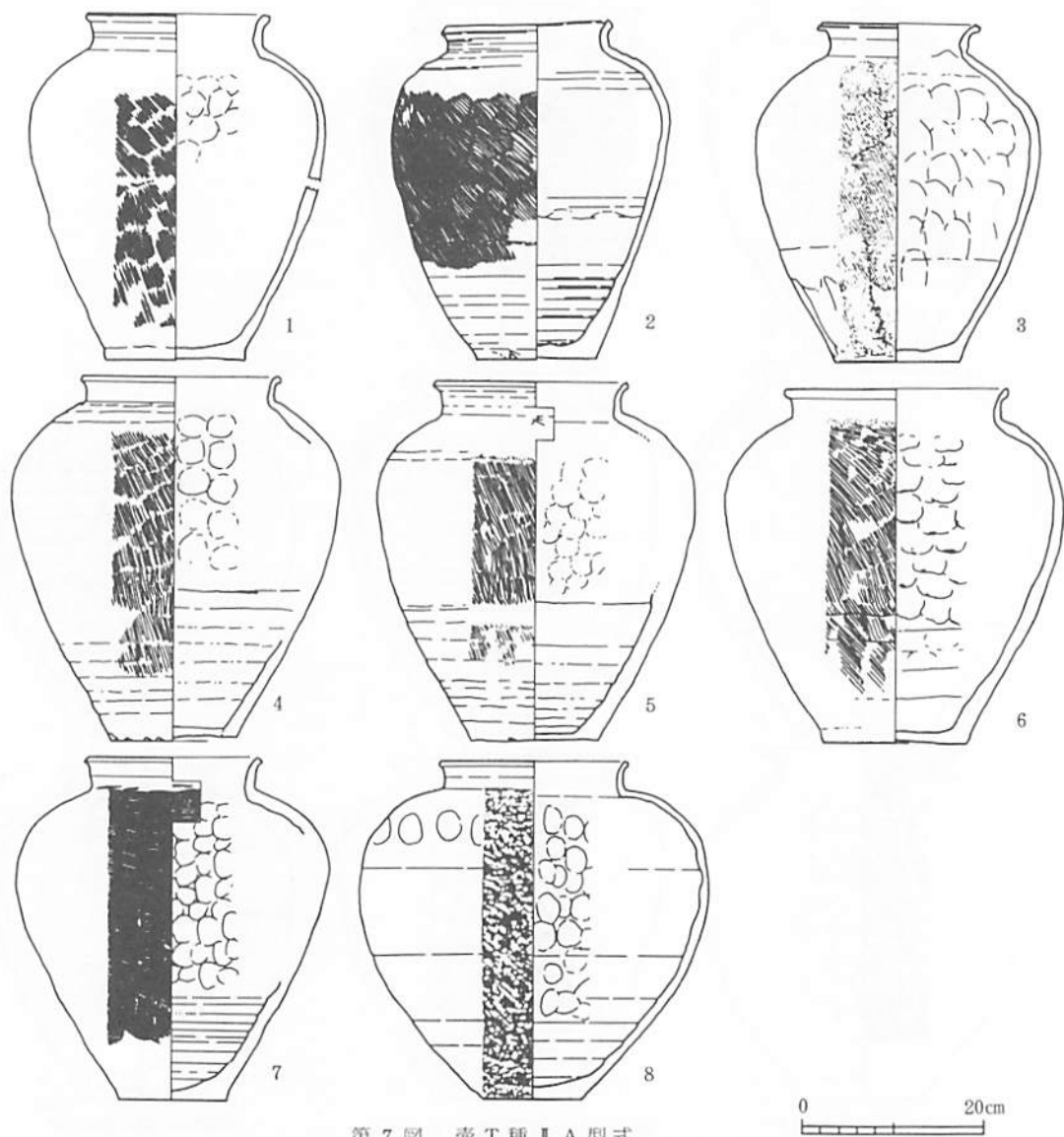
I類 底部からやや内湾しながら体部が立ち上がり、口縁部が若干内屈し、端部付近で先細りになるもの。端面が外削ぎになるものと凹むものが主体で、内削ぎになるものが若干存する。片口部分は、口縁部を平直に仕上げた後に手で凹ませただけとみられる。内面の櫛目はないものがほとんどで、あっても少数本を一単位として曲線を描くものである。底部の切り離しは回転糸切りと静止糸切りの両方がある。京ヶ峰経塚出土のものが指標(第9図)。



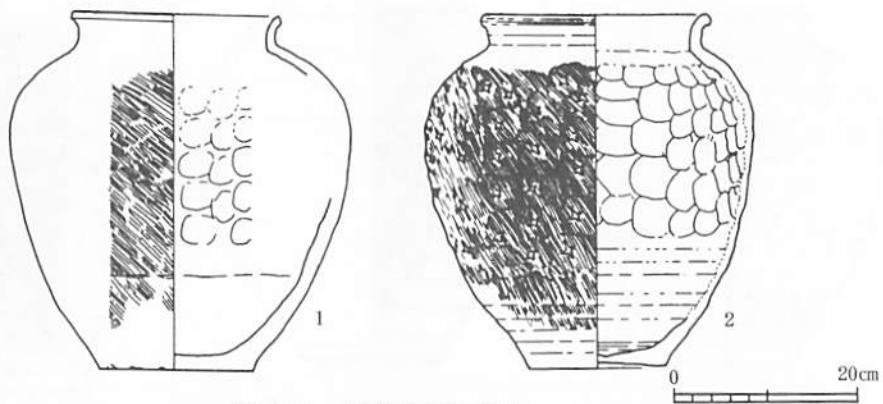
第 5 図 壺 T 種 I A 型式



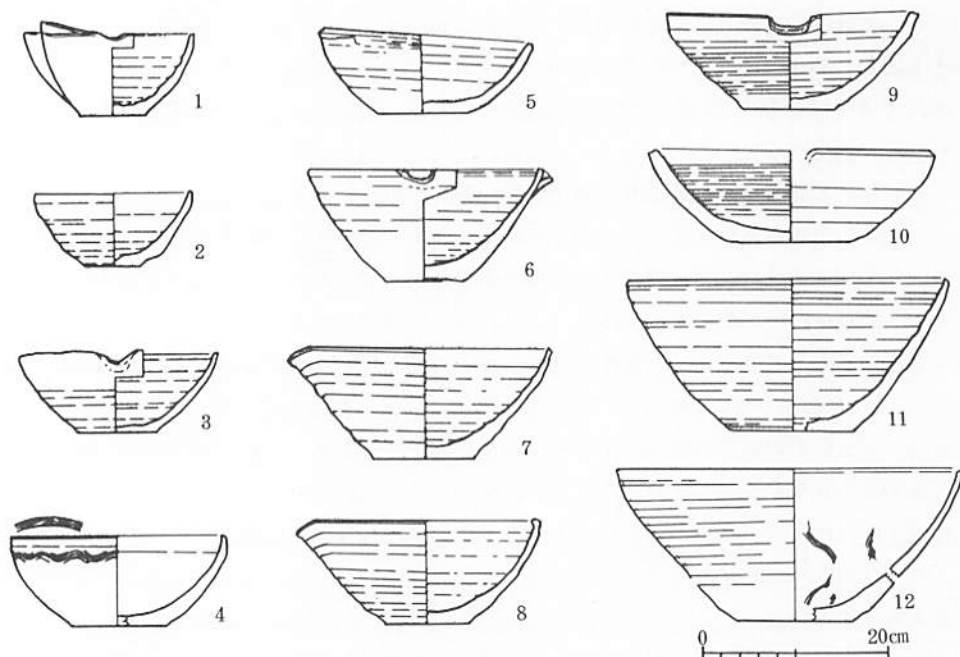
第 6 図 壺 T 種 I C 型式



第 7 図 壺 T 種 I A 型式

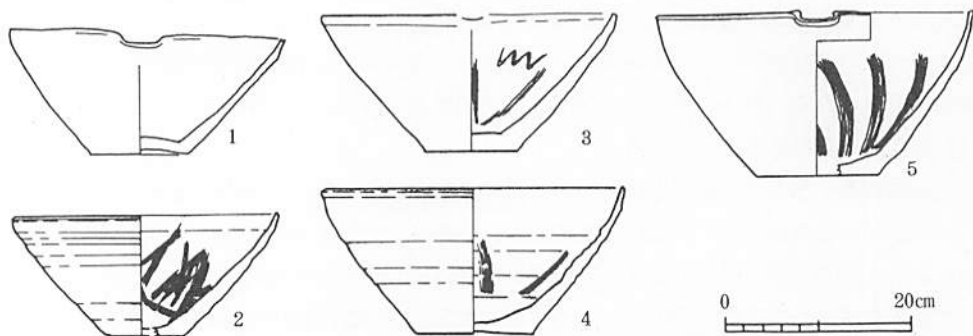


第 8 図 壺 T 種 I B 型式



第9図 片口鉢Ⅰ類

Ⅱ類 底部から直線的に体部が立ち上がり、口縁部に至り内屈し、端部付近でやはり先細りになる。端面はⅠ類と同様である。片口部分の造りは、Ⅰ類のもの他、片口両脇を指で押し上げたかのように盛り上がるものもみられる。櫛目は素文のものと同様に僅かに入ることがある。底面はやはり2種類がある(第10図)。



第10図 片口鉢Ⅱ類

鉢は製作技術からみると、すべてが粘土紐巻上げ、ロクロ調整によっており、底面は砂底または糸切り技法によって切り離している(糸切り後調整を施すものもある)。ところで須恵器環において(回転)糸切り痕をロクロ水挽き技法の証左と見る向きもあるが、実際には巻上げ後の糸切りも技術的には可能であり、糸切り痕の有無で水挽きか巻上げかを論ずることはできない。成形技術と底部切り離し技術とは別々に論じられるべきである。珠洲系陶器の場合も回転糸切り痕を残すものがあるが、上の事情をかえりみるまでもなく、粘土紐巻上げの継ぎ目およびそれに沿ったひび割れが観察されるため、巻上げ成形によることは疑えない。

ここで底部切り離し技術を時期的・地域的な観点から見てみたい。吉岡氏はこの点について、①Ⅰ期から静止糸切りと回転糸切りが併用されており、その後静止糸切りに統一される、②珠洲地方ではⅠ期をもって回転糸切りが見られなくなる、③東北地方ではⅡ期以降も回転糸切りが見られる、と指摘している。一方古代の土器の底部切り離し技法についてみると、例えば須恵器^(注25)では北陸においては回転糸切りのみで、静止糸切りはない。東北においては、一般的に静止糸切り・ヘラ切りから回転糸切りへという変遷が認められている。これらのことから、双方とも従前の回転糸切りの伝統を受け継ぐことが考えられるが、静止糸切りも存在する事実が、^(注26)壊と片口鉢という法量の違いに起因するのか、つまり、製品の重量からみて、ロクロが止まっている方がより安定性をもって底部を切り離すことができるため、新たに採用されたことを意味するのかということも、同時に考えられることである。実際にⅠ期の資料を見てみると、静止糸切りの方が法量的に大きいものが多い傾向があるが、逆に小さなものもあるため、法量による規制が存在したとは考えられないが、いずれにしても、北陸でかつて伝統のなかった静止糸切り技法が珠洲窯で採用されたことは、須恵器壊とは大きさも重量も異なる珠洲系陶器をロクロから切り離すにはより有効であったためであろう。そのことは、静止糸切りのみがその後も存続しえたことから窺える。あるいは、別系統の工人の同時操業という点に起因するものかもしれない。

以上各器種毎に分類した各型式のセット関係と時期区分を設定したうえで、編年と地域性について考えてみたい。

珠洲系陶器Ⅰ期前半

甕Ⅰ類(型式)、壺Ⅰ種ⅠA・ⅠC型式、片口鉢Ⅰ類(型式)をセットと見做したものである。その開始年代は紀年銘共伴資料より12世紀中葉、そして下限は、壺Ⅰ種ⅡA型式に属する金仙寺経塚出土の嘉応2年(1170)在銘遺物共伴資料から12世紀後半頃としたい。金仙寺経塚資料は、ⅠA型式とⅡA型式の過渡的なものとの解釈から上述の下限年代が想定される。

この時期の各器種間の相互関係についてみると、特に甕と壺Ⅰ種の製作技法に共通する要素が多く見受けられる。具体的には、横U字形に屈曲する口頸部、頸基部より下がった位置からの叩打という点などにあらわれている。

その他特筆すべきことは、東北についてのみC類の胴部形態をもつものが存在することである(ⅠC型式)。さらにこれらが丸口造りであり、焼成においても北陸出土のものとは異なっている。また、第2図8・第3図1のように叩目痕を擦り消すものも東北固有のものといえるであろう。

さて先に述べた壺Ⅰ種Ⅰ類の扱いであるが、本期通有の壺Ⅰ種に共通する点が多く、また第1図1などはいくぶん先行する要素も窺えるが、一応本期併行と考える。

珠洲系陶器Ⅰ期後半

甕Ⅱ類(型式)、壺Ⅰ種ⅡA・ⅡB型式、片口鉢Ⅱ類(型式)をセットと見做したものである。比定時期は、上限を12世紀後半、下限を後続する型式に属する紀年銘資料である新潟県柏崎市上軽井川経塚出土品より、12世紀末から13世紀初頭頃とする。

本期においては、壺Ⅰ種Ⅱ類の胴部形態をもつものが現れ、C類のものが姿を消すことがわかる。ここでB類がすべて東北出土であるのは、Ⅰ期前半期のC類と同様に東北固有のものといえる。さらに壺Ⅰ種ⅡA型式の内容は叩打割合からみて2分され、ⅠA型式からの関連から叩打の少ない第7図1-6が先行し、7・8が後続するものと思われる。

壺T種観察表

図番号	番号	出土地	器高 (cm)	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	口縁 端部	形態指数			叩目			成形・調整上の特徴他	色調	その他	文献注
								高口	胴口	重心	分類	条数/3cm	割合(%)				
4 (I')	1	富山県石礪波郡福光町荆波神社経塚	30.1	20.5	31.7	12.0	3	65	65	60	a			4段成形, 巴文押印 砂底 刻文 斜格子叩目 斜格子叩目	灰褐	口縁部欠失 片口鉢共伴	15
	2	伝・石川県輪島市町野町	(53.5)	19.3	42.6	13.5		(36)	45	(62)	b	15	71		暗茶灰		29
	3	山形県鶴岡市大山経塚	37.8	16.8	33.6	16.2	3	42	50	65	b	10	52		15		
	4	東根市大森観音寺山経塚	35.7	17.4	31.2	12.6	5	49	56	61	a		79		27		
	5	石川県珠洲市寺社1号窯	38.2	26.3	41.2	14.5	1	69	64	65	a		65		15, 28		
	6	秋田県湯沢市松岡経塚	35.8	21.6	35.3	12.4	3	60	61	70	b	9	87		暗紫灰		15, 28
5 (I A)	1	富山県中新川郡上市町京ヶ峰経塚	39.5	22.3	33.4	12.6	1	57	67	70	a	17~18	66	4段成形, 刻文「T」	淡灰褐	片口鉢共伴, 仁安2(1167)	15, 28
	2	石川県金沢市小坂経塚	37.8~39.5	25.0	35.1	13.7	1	63~66	71	63~66	a	10~11	66	灰褐	片口鉢共伴	32	
	3	新潟県見附市小栗山不動院裏山経塚	40.2	25.6	37.6	14.5	6	67	68	64	b	11	81	4段成形	片口鉢共伴	31	
	4	〃 〃 〃	39.5	21.5	33.5	12.0	1	54	64	67	b	12	57	灰	片口鉢共伴	31	
	5	〃 〃 〃	35.6	20.0	32.2	12.1	1	56	62	63	b	10	72	灰	片口鉢共伴	31	
	6	山形県寒河江市高瀬山経塚	38.5	21.4	35.1	12.5	1	56	61	67	a		72	灰黒	片口鉢共伴	29	
	7	〃 鶴岡市西目神社口	35.8	23.0	34.2	13.0	1	64	67	72	d1		65	暗茶褐	片口鉢共伴	15, 28	
	8	秋田県湯沢市松岡経塚	36.7	15.7	32.6	13.5	6	44	49	68	—	—		刷毛目状調整	片口鉢共伴	15, 28	
6 (I C)	1	〃 平鹿郡大森町上溝観音寺経塚	37.5	18.0	32.2	13.7	6	48	56	68	—	—			久安5(1149)	15, 28	
	2	山形県東田川郡羽黒町羽黒山頂経塚	40.2	20.6	34.2	15.2	6	49	60	64	d1		77	灰黒	片口鉢共伴	29	
	3	〃 鶴岡市田川七日台3号墓	41.1	28.7	36.0	15.1	6	71	80	68	b	10	84	片口鉢共伴	29		
7 (II A)	1	富山県下新川郡入善町じょうへのま遺跡	(38)	(20)	(33)		6	53	61	68	a	9	88	静止糸切り	暗灰		30
	2	新潟県西蒲原郡巻町竹野金仙寺経塚	37.0	18.5	31.4	13.3	1	50	59	66	a	8~10	52	4段成形, 静止糸切り	灰茶褐	嘉応2(1170)	15, 28
	3	〃 三条市諏訪神社遺跡	36.5	16.5	30.8	13.5	2	49	57	64	b	13~14	79	体部下半ヘラケズリ	淡灰	片口鉢共伴	33
	4	山形県鶴岡市湯田川経塚	39.0	20.0	34.0	15.0	1	51	59	67	a		67	4段成形, 刻文「大」	黒褐	片口鉢共伴	29
	5	〃 〃 西目経塚	38.3	20.3	34.5	13.8	4	53	59	68	a	11	57	灰黒	片口鉢共伴	29	
	6	〃 〃 田川七日台2号墓	36.0	22.4	34.4	14.4	6	62	65	64	b	11	73	灰褐	片口鉢共伴	29	
	7	〃 西田川郡温海町楨代墳墓	37.8	18.8	33.0	11.7	1	50	57	69	c		73	押印, 静止糸切り	赤灰	片口鉢共伴	24
	8	〃 東置賜郡川西町塔ヶ峰経塚	37.0	20.8	37.5	11.0	4	56	55	62	b	(14)	89		赤灰	片口鉢共伴	34
8 (II B)	1	〃 鶴岡市田川七日台5号墓	37.9	21.6	32.6	15.7	1	57	66	64	a		73		淡茶褐	片口鉢共伴	29
	2	〃 飽海郡八幡町楯の腰経塚	36.6	22.4	33.5	14.3	4	62	67	66	a		77	「十」字文叩目	淡灰	片口鉢共伴	24

片口鉢観察表

図番号	番号	出土地	器高	口径	底径	口高指数	口底指数	櫛目本数×条数	成形・調整上の特徴他	底面	色調	その他	文献注
9 (I)	1	富山県中新川郡上市町神田遺跡	8.6	17.8	7.4	48	42	—		回転糸切り(ヘラで消す)			35
	2	石川県鳳至郡穴水町桜町遺跡	8.0	17.0	4.5	47	26	—	高台風底部	回転糸切り		壺T種片, 水注共伴	37
	3	山形県飽海郡松山町田沢長根墳墓	8.7	21.7	9.5	40	44	—		静止糸切り	紫黒	壺R種共伴	24
	4	富山県中新川郡上市町神田遺跡	9.5	23.0	5.0	41	22	—	口縁外面に櫛目波状文	板目ナデ			35
	5	新潟県三条市諏訪神社遺跡	7.4~9.8	22.0	10.0	34~45	45	—		回転糸切り		壺T種共伴	33
	6	富山県中新川郡上市町京ヶ峰経塚	12.0	25.5	8.6	47	34	—		静止糸切り	淡灰褐	〃	15, 28
	7	新潟県見附市小栗山不動院裏山経塚	11.0	24.2	9.1	45	38	—	ヘラ描き文あり	回転糸切り	青灰	〃	31
	8	〃 〃 〃	11.7	27.0	11.0	43	41	—		〃	灰	〃	31
	9	山形県鶴岡市田川七日台3号墓	12.0	27.3	10.4	44	38	—		〃	暗灰	〃	29
	10	〃 〃 大山経塚	10.4	30.4	11.4	34	38	—		回転糸切り+板目ナデ	〃	〃	29
	11	石川県羽咋市丹治山福水寺遺跡	15.6	34.0	13.0	46	38	—		静止糸切り+ナデ	暗青灰		38
	12	富山県中新川郡上市町中小泉遺跡	15.4	36.8	12.3	42	33	5~8×12	曲線櫛目	静止糸切り			35
10 (II)	1	石川県金沢市小坂経塚	12.4~13.3	29.2	11.2	42~46	38	—	上げ底気味	静止糸切り?	灰	壺T種共伴	32
	2	富山県中新川郡上市町神田遺跡	12.0	28.8	9.2	42	32	?	曲線櫛目	板目ナデ			35
	3	〃 〃 〃 弓庄城跡	13.5	31.5	9.9	43	31	少数少条	直線+曲線櫛目	回転糸切り+ヘラオコシ			39
	4	秋田県秋田市秋田城跡	15.4	31.8	12.4	48	39	7×8					39
	5	富山県中新川郡立山町若宮B遺跡	17.0	34.4	13.2	49	38	9×12	櫛目は底内面に至らず	静止糸切り			36

さて、以上のⅠ期の細分はⅠ期の標式窯とされてきた寺社1・2号窯出土遺物の分類から出発したが、吉岡氏によるとⅠ期でも若干下る年代に窯の年代を求めている。筆者は対応関係を認め(注27)たうえでの細分を試みたのであるが、むろん珠洲窯についてのみいえることであり、東北については該期窯跡の存在が報告されているものの、内容が十分把握されていないのが現状である。

5. おわりに

これまで珠洲系陶器基本3器種の型式分類をはじめ、初期珠洲系陶器生産に関して筆者なりに様々に論じてきたが、これまで定説化している事からでも新たな問題点として提示しえたと考える。またその問題の考察を通して、東北出土の珠洲系陶器の分類・編年・北陸との相互交渉等について、より具体相に迫ることができたのではないだろうか。新資料の発見を待たなければ解決できない問題もあろうが、根本的な見直しもまた必要なのではと考えるものである。

最後に、本稿は卒業論文を一部改変したものであるが、数々の御教示をいただいた関係各位に改めて御礼申し上げるものである。

注1. 名称については、珠洲窯で生産されたものを「珠洲陶器」それ以外の地域で生産されたものを「珠洲系陶器」とするのが妥当であろうが、現時点では全個体にわたって生産地を同定できないため、一括して「珠洲系陶器」としておく。

注2. 「亀ヶ谷」『石川県珠洲郡誌』1923

注3. 駒井和愛他「古墳文化」『能登』1955

注4. 岡田宗叡「能登の珠洲古窯」『陶説』1961

注5. 吉岡康暢「中世陶器の生産と流通(一)」『考古学研究』28-2, 1981に一部資料の分析データを所収

注6. 植崎彰一「古代・中世窯業の技術の発展と展開」『日本の考古学』Ⅳ 1967

注7. 植崎彰一『中世の陶器』神奈川県立博物館 1972

注8. 吉岡康暢「加賀・珠洲」『日本陶磁全集』4 1976

注9. 『図解考古学辞典』, 注6文献等

注10. 例えば、福島県大久保A遺跡1号窯出土遺物は成形・器形から見れば全く土師器としか言いようのないものでありながら還元焙焼成している例があり、単に製作技術からのみ規定しえない場合もある。

注11. 吉岡康暢「中世陶器の生産と流通(二)」『考古学研究』27-4 1982 他所収編年表による。

注12. 秋田県平鹿郡大森町上溝観音寺経塚出土資料。久安5年(1149)銘経筒共伴。

注13. 吉岡康暢「奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会他 1983

注14. 福井県敦賀市深山寺経塚群ほかから出土。

注15. 吉岡康暢「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」『石川県立郷土資料館紀要』第14号 1985

注16. 小笠原好彦「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」、桑原滋郎「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』1976

注17. 白鳥良一「東北部地方の様相」『シンポジウム『平安時代の土器・陶器』の記録』『愛知県陶磁資料館研究紀要』2 1983

注18. 『平泉遺跡総合調査第1期第1次平泉館跡発掘調査略報』平泉町教育委員会他 1971

注19. 「赤焼」の土器は平窯での焼成も報告されており、一方いわゆる折衷系は密窯によっており窯構造を異にする。

注20. 第2図2の羽黒山頂経塚出土資料は同所から紀年銘資料を出土しているが、再埋納の可能性が指摘されており年代決定の基準資料とは認めがたい。

注21. 口縁端部の分類は次により行なった。

1類一端面に平直または凹面状に面取りするもの 2類一端部外面を嘴状に引き出すもの 3類一端

部全体が断面三角形をなすもの 4類—多面体状に仕上げるもの 5類—一端部を肥厚させ、その直下で一旦くびれるもの 6類—円頭状に仕上げるもの

注22. 叩目方向の分類は次により行なった。

a類—最上部からの斜位の叩目 b類—叩き締めの際により横位から斜位へ変わる叩目 c類—横位または斜横位の叩目 d₁類—胴部に斜横位の叩目を施した後、口頸下部に横位の叩目を施す d₂類—胴部に綾杉状の叩目を施した後に、口頸下部に横位の叩目を施す d₃類—胴部に階段状の叩目を施した後に、口頸下部に横位の叩目を施す e類—綾杉状または階段状の叩目

注23. 同所出土の壺T種は2個体あり、在銘資料との共伴関係が明確でないが、形式的にはⅡA型式のものが共伴した可能性が高いと思われる。

注24. 吉岡康暢他「特集 東北・北陸中世陶器検討会」『庄内考古学』第18号 1982

注25. 同上文献

注26. 白鳥良一「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ 宮城県多賀城跡調査事務所 1980

注27. 吉岡康暢他「珠洲古窯跡」『珠洲市史』第1巻 1976

注28. 吉岡康暢「珠洲系陶器の暦年代基準資料」『北陸の考古学』 1983

注29. 佐藤禎宏「最上川流域の珠洲系陶器」『庄内考古学』第17号 1980

注30. 山本正敏他「じょうべのま遺跡—C. K地区の調査—」入善町教育委員会 1985

注31. 小出義治「小栗山不動院裏山経塚群」見附市教育委員会 1977

注32. 吉岡康暢「金沢市小坂第1号墳の調査」『石川考古学研究会々誌』第13号 1970

注33. 中島栄一「諏訪神社遺跡」『三条市史』 1981

注34. 川崎利夫「置賜盆地の中世陶器」『置賜考古』第5号 1979

注35. 橋本正春他「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編一」上市町教育委員会 1982

注36. 酒井重洋他「同上一立山町土器・石器編一」立山町教育委員会 1982

注37. 四柳嘉章他「西川島Ⅰ」穴水町教育委員会 1980

注38. 土肥富士夫「丹治山福水寺遺跡」羽咋市教育委員会 1982

注39. 『秋田城跡』秋田城跡発掘調査事務所 1982

補注 形態指数は次のように求めた。

$$\text{高口指数} = \frac{\text{口径}}{\text{器高}} \times 100$$

$$\text{胴口指数} = \frac{\text{口径}}{\text{胴径}} \times 100$$

$$\text{重心指数} = \frac{\text{胴径までの高さ}}{\text{全器高}} \times 100$$

$$\text{口高指数} = \frac{\text{器高}}{\text{口径}} \times 100$$

$$\text{口底指数} = \frac{\text{底径}}{\text{口径}} \times 100$$

参考文献

- 『珠洲古陶』石川県立郷土資料館 1978
- 『中世のやきもの—珠洲・越前を中心に—』致道博物館 1980
- 『東北の中世陶器』東北歴史資料館 1983
- 荻野繁春「中世の須恵器を議論するにあたって」『福井考古学会々誌』創刊号 1983
- 金子拓男「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立」『信濃』27-1 1975
- 吉岡康暢「北東日本海域における中世陶磁の流通」『月刊文化財』215 1981